



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ
博多の歴女 白駒妃登美

そのためには何をしたらいいか。そうだが、日本精神を学ぶには和歌がいい。和歌こそ日本の心を表している。これまでも台湾のおじいちゃん、おばあちゃんたちは「台湾歌壇」という会で和歌や俳句を楽しんできましたが、近年はそこに孫のような世代の

✿ 今、台湾で静かなブームに

昨年、台湾を訪れた時のことです。台湾が親目的なことは皆さんもご存じかもしれませんが、そんな現地の方々、特に八十代、九十代の方とお話をする中で、はっと気づかされたことがあります。

今年は終戦から七十年。ですから八十代以上といえば、戦前の日本統治を知る世代です。彼らは日本の教育を受けたことを誇りに思い、日本精神（台湾語で「リップンチュエンシン」）を次世代へ伝えることがわが使命と語っていらっしゃいました。

— 表現力豊かな歌人・額田王①

ぬかたのおおきみ

和歌に息づく「日本の心」

若者も加わっているといいます。

和歌というのは、私たちが考えている以上に「日本の宝」なのかもしれませんね。中でも私は、今から約千三百年前に編纂された現存する最古の和歌集『万葉集』に、その原点があると感じています。

例えば、万葉集以後の和歌は愛しい人を「待つ」という情景に「松」をかけるなど、情感を巧みな変化球で表現しているものが多いのですが、万葉集は直球勝負なんです。ではどんな直球かということ、今回は額田王の話に重ねてご紹介します。

✿ 情景と感情が伝わる歌

時は西暦七世紀、飛鳥時代です。額田王は大海人皇子（第四十代・天武天皇の妻となり、女の子をもうけますが、後にその兄である中大兄皇子（第三十八代・天智天皇



額田王（生没年不詳）

「万葉集」（西暦7世紀ごろ編纂）初期の代表的歌人。その歌は雄渾で優艶といわれる。大海人皇子の妻となるも、その後、中大兄皇子の妻となる。

【イメージイラスト】アオジマイコ